

<大賞>

「移植見送り問題」を巡る一連の報道

読売新聞東京本社 臓器受け入れ断念取材班

臓器移植が日本で始まって以来、ドナー不足が課題とされてきました。メディアは、海外に救いを求める幼い子の悲劇や臓器提供を呼びかけるキャンペーンを続けてきました。ところが、現実には臓器提供は増えつつあり、にも



もかかわらず、医療機関が対応できないために、数多くの移植が見送られているという事実を2024年元日一面でスクープしました。取材班は、それだけでなく、1997年の臓器移植法施行以後に行われた脳死下の臓器提供 全1028件のデータベースを分析し、なぜ、このような事態が起きるのかを掘り下げました。そして、医療現場の人員や設備の逼迫した状況、少ない診療報酬、日本臓器移植ネットワークの対応の遅れなどの背景と問題点を掘り下げ、日本で何をすべきかの示唆をあたえました。

この報道の社会的インパクトは大きく、厚生労働省が実態把握に乗り出し、与野党の政治家が動き

始め、6月に閣議決定された骨太方針には、「臓器提供の増加を踏まえた移植のための医療提供体制の構築」が盛り込まれました。元日のスクープから10月末までの間に、1面トップ13本、「医療ルネサンス」の連載を含む73本が掲載されました。取材は、医療部、科学部、海外特派員たちの協力でおこなわれ、多角的に、掘り下げました。このような総合力と裏付けの手法は、新聞でしか行えないもので、「大賞にふさわしい」と評価されました。

<優秀賞>

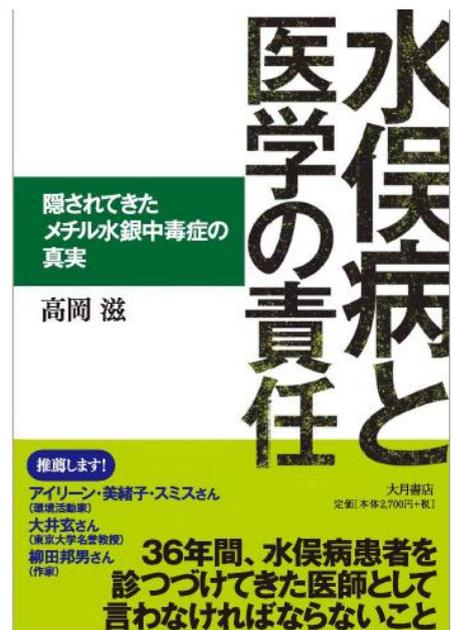
『水俣病と医学の責任——隠されてきたメチル水銀中毒症の真実』（大月書店）

神経内科リハビリテーション協立クリニック院長 高岡 滋さん

著者は36年間、水俣病を臨床の第一線で診療し続けて来た臨床医。水俣病がメチル水銀中毒であることを突き止めた研究者が行政に組み込まれ、研究を放棄していく経緯を克明に記述しています。それだけでなく、脳の神経細胞がメチル水銀によってまるで間引きされるように徐々に脱落していくことが水俣病の病態に影響していることを明らかにし、医学界と行政の不作為についても、さまざまなデータで示しています。

2022年12月に初版が刊行された翌年の3月に3刷りが発刊されています。一般読者にも知ってほしいと、「ですます調」で書かれているとはいえ、医学用語に満ち満ちたこの本が広く読まれているのは、水俣病に対する「歴代の不作為」を、これだけ綿密に証拠を集め、医学的に立証した本が、これまでになかったためと思われる。

目次は明快で、「水俣病発生時の医学者たち」「変節を遂げる医学者たち」「水俣病医学、誤りのスパイラル」「今なお続く医学者たちの誤り」「医系技官という存在」、そして、「未来に向けて、水俣病から学ぶ」という終章で結ばれています。日本の医療のあり方と問題点があぶりだされており、「他の医療分野の理不尽を解決するためにも貴重」と高く評価されました。



<優秀賞>

「望まれない性を生きて 白井崇来人 闘いの十年」

RSK 山陽放送 檜崎基弘さん 古川豪太さん

女性として生れ、男性の心をもつ白井崇来人さんは、初め、現状のまま静かにしていたかったそうです。それが、「妻」の支えで裁判を起こし、「社会の壁」を打ち破る姿勢に変わっていきます。その過程を丁寧に描いている点が、ドキュメンタリー作品として素晴らしいと評価されました。



性的マイノリティー、LGBT は、左利きの人と同じ7.6%くらいの「ふつうのこと」といわれます。けれど、ほとんどの人が、偏見をおそれて名乗ることができずにいます。崇来人さんの場合は、L(レズビアン)、G(ゲイ)、B(バイセクシュアル)、T(トランスジェンダー)のTにあたり、手術しなければ戸籍上の性をかえることも、結婚することも認められずにいました。

岡山の大学病院にはジェンダー関連疾患の診断や治療をするジェンダーセンターがあり、取材班は、国際的な動きや医学的側面も丁寧に報道しています。性的マイノリティーの受け入れが遅れている日本での様々な問題が、ぎっしり詰め込まれています。偏見にさらされる可能性のある人々を10年にわたって撮り続けることができたのは、取材者への深い信頼なしには不可能だったことでしょう。そのリアル感は、今の時代に強いインパクトがあり、新しい時代が見えてくる作品になっていると評価されました。

<優秀賞>

連載「700万人時代 認知症とともに生きる」

書籍『認知症 700万人時代 ともに生きる社会へ』（かもがわ出版）

京都新聞 鈴木雅人さん 松村和彦さん

新聞の発想を次々と変える企画力が注目されました。

たとえば、新聞の見開きにあたるA1サイズの紙面をフルに使った「認知症50年の歴史」の個性的な紙面づくりが度肝をぬきます。

認知症の報道にありがちな「予防と治療」を、あえてテーマにしていないのも特色で、「病ではない」というテーマを掲げることで、人として前向きに生きる姿を描いています。

新聞では、写真は引き立て役になりがちですが、連載記事やあわせて刊行された書籍では、写真が文章を引っ張っていく不思議な力があります。

写真の男性は医師。妻が1989年に認知症と分かり、24年後に天寿を全うするまで介護を続けました。その後、みずからも認知症に。悲嘆、喪失、疲労、孤立。認知症の進行に伴って何度もピンチが訪れたのですが、「天使のよう」と表現するホームヘルパーたちと一緒にピンチをチャンスに変え、2023年秋、妻が長年暮らし亡くなったこの家で静かに息を引き取りました。

老いる人と支える人の関係を考え続ける。弱って、時にはふさぎ込んでしまう高齢者の心を、生き生きとさせる方法はないのか。ヘルパーや看護師や自分自身に問い続けた一生。こんなエピソードがちりばめられ、新時代のメディアの可能性を開く、と評価されました。

